

『南山神学』31号(2008年3月) pp. 41-64.

「人間の魂は、身体と結合している時、離在的諸実体を 知性認識することができるか」

トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第十六問題

翻訳と註¹

井上 淳

¹ 本訳は Leonina 版，すなわち B. C. Bazan ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita, Tomus XXIV-1, Quaestiones Disputatae de Anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし，註の多くもこの版に依拠したが，次の二つの版も常に参照し，Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの，さほど重要ではないと思われる小さな異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones de Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestio Disputata de Anima in Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965)。以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また，翻訳にあたっては，以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001)。以降 Rowan 訳，Robb 訳，および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版による翻訳，Robb 訳は本人の校訂版による翻訳，Vernier 訳は Leonina 版による翻訳である。

なお，本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones Disputatae de Anima* (QDA), *Quaestiones disputatae de ueritate* (QDV), *Quaestiones disputatae De malo* (QDM); *Super Boetium De Trinitate (In De Trin.)*, *Summa contra Gentiles* (SCG), *Summa theologiae* (ST), *Compendium theologiae* (CT); *Sententia super Metaphysicam (In Metaph.)*, *Sententia Libri De anima (In De anima)*; *Sententia Libri Ethicorum (In Ethic.)*; *Sententia Libri De sensu et sensato (In De sensu)*; *Expositio Libri Posteriorum (In Post.)*; *De angelis seu de substantiis separatis (De angelis)*; *Scriptum super libros Sententiarum* (SSS)。テキストは SSS に Madonnet-Moos 版と Parma 版を用いた他は基本的に全て Leonina 版を用いたが，参照の際の便宜を考えて，いくつかのテキストには Marietti 版の段落番号を付した。

第十六問題では²、魂は、身体と結合している時、離在的諸実体を知性認識することができるのであるか否かが討究される³。そして、〔その答は〕然りであるようにも思われる。

【異論】

- (1) なぜなら、いかなる形相も、それが自然本性的に合一されているところの質料によって自らの目的 (finis) を妨げられることはないからである⁴。しかるに、知性的な魂の目的とは、最高度に可知的なもの⁵である離在的諸実体を知性認識することであるように思われる。なぜなら、各々の事物の目的は、自らの活動における完全性へと到達することにあるからである。それ故、魂は、それ自らに固有の質料である、このような身体と合一しているということによって離在的諸実体を知性認識することから妨げられることはないのである。
- (2) 更に。人間の目的 (finis hominis) は幸福 (felicitas) である。しかるに、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』第十巻によれば⁶、究極の幸福は、

² QDA, q. 16 の平行箇所は次の通りである。QDV, q. 10, a. 11; q. 18, a. 5, ad 7, ad 8; *In De Trin.*, q. 6, a. 3-4; SCG II, c. 60; III, c. 41-46; STI, q. 88, a. 1-2; *In Metaph.*, II, lect. 1. このうち出版されている邦訳は、STI, q. 88, a. 1-2, 大鹿一正訳『トマス・アクィナス 神学大全』第6冊(創文社, 1969年)および、*In De Trin.*, q. 6, a. 3-4, 長倉久子訳『トマス・アクィナス 神秘と学知』(創文社, 1996年)である。

³ 離在的諸実体 (substantiae separatae) とは、非質料的諸実体 (substantiae immateriales) とも呼ばれ (STI, q. 88, a. 1), 質料から分離独立して存在する知性的諸実体, すなわち天使たち (angeli) を意味する。天使についてのトマスの見解は ST や SCG などいくつかの著作から知ることができるが、*De angelis* においてトマスは、古代ギリシア哲学以来の思想の歴史における離在的実体についての様々な考えを批判的に概観した後(第1章~17章)、カトリックの信仰による霊的実体, すなわち天使についての教えを解明している(第18章~20章)。邦訳: 八木雄二・矢玉俊彦訳「離在的実体について」山本耕平 監修『中世思想原典集成』14(平凡社, 1993年)。

⁴ Cf. STI, q. 88, a. 1, arg. 3; SSSII, d. 23, q. 2, a. 1, arg. 5.

⁵ Leonina 版と Robb 版は intelligibilia, Marietti 版は intelligibiles.

⁶ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, X, 7, 1177a12-21.

人間の最高の能力、すなわち知性の、最も高貴な対象と関わる活動において成立するのであるが、その最も高貴な対象とは、離在的実体に他ならないと思われる⁷。従って、離在的諸実体を知性認識することが、人間の究極目的なのである。しかるに、もし人間がそれ自らの目的から完全に逸脱するのだとすれば、それは不合理である。なぜなら、もしそうなら、人間は空しく存在していることになるからである。それ故、人間は離在的諸実体を認識することができるのである。しかるに、魂が身体と合一しているということは、人間の本質（ratio）に属することである。それ故、魂は、身体と合一している間、離在的諸実体を知性認識することができる。

- (3) 更に。あらゆる生成（generatio）は何らかの終局へと至る。なぜなら、如何なるものも無限に動かされることはないからである。しかるに、知性にも何らかの生成というものがある。それは、知性が可能態から現実態へと導かれるという意味で、すなわち現実知っている状態になるという意味においてである。この生成は、それ故、無限に進むのではなく、いつか何らかの終局へと至る。それは、完全に現実態となる時である⁸。しかしながら、このことは、知性が可知的なるものを全て知るこなしには、中でもとりわけ離在的諸実体を知ることなしには⁹、あり得ない。従って¹⁰、人間知性は離在的諸実体を知性認識することへと達することができるのである¹¹。
- (4) 更に。それ自体として離在的であるところのものを知性認識することよりも、離在的ではないところのものを離在的なものにして、それを知性認識

⁷ Cf. *In De Trin.*, q. 6, a. 4, arg. 3.

⁸ Leonina 版と Marietti 版は factus in actu, Robb 版は sciens in actu.

⁹ Leonina 版と Marietti 版は precipue/praecipue, Robb 版は praecipua.

¹⁰ Leonina 版は igitur, Robb 版と Marietti 版は ergo.

¹¹ アヴェロエスによれば、これはアフロディシアスのアレクサンドロスが唱えた説である。Averroes, *Commentarium magnum in Aristotelis de anima libros* (以降は *Super De anima* と略記する), III, 36. (F. S. Crawford ed., *Corpus commentariorum Averrois in Aristotelem*, vol. VI, 1 (Cambridge: The Mediaeval Academy of America, 1953), pp. 488-489, u. 263-82).

することの方が、より難しいことであると思われる¹²。ところが、我々の知性は、身体と合一している時でさえ、質料的諸事物から、その質料的諸事物をそれによって知性認識するための可知的諸形象を抽象することにおいて、それ自体としては離在的ではないところのものを離在的なものにしてしているのである。それ故、離在的諸実体を知性認識することは、なおのこと我々の知性にとって可能であろう。

- (5) 更に。過度に可感的なもの (*excellencia sensibilia*) は、それだけ、より少なく感覚される。なぜなら、それは感覚器官の調和を壊すからである¹³。しかしながら、もし過度に可感的なものによって壊されないような感覚器官があったとしたら、その器官は、対象がより可感的であればあるほど、それをより多く感覚することができるであろう。しかるに知性は、如何なる仕方によっても可知的な対象によって壊されることはなく、むしろ、それによって完成される。それ故、知性は、その対象が可知的であればあるほど、より多くそれを知性認識できるのである。ところで離在的諸実体は、非質料的であるが故に、それ自体として現実態的に可知的なのであり、可能態的にしか可知的でない質料的諸実体よりも、より優れて可知的である。従って、知性的魂は、身体と合一している時、質料的諸実体を知性認識できるのであるから、なおのこと多く離在的諸実体を知性認識することができる¹⁴。
- (6) 更に。知性的魂は、身体と合一している時にも、何性 (*quidditas*) を有する諸事物から何性を抽象する。しかしこの抽象は無限に進むのではないのであるから¹⁵、必ず、何性を有しているものである何性にはなく、単独

¹² アヴェロエスによれば、これはテミスティウスが唱えた説である。 Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford ed., p. 487, u. 235-39).

¹³ たとえば、大きすぎる音や明るすぎる光、強烈な匂いなどが例として挙げられるであろう。 Cf. Aristoteles, *De anima*, III, 429a-b5.

¹⁴ ここに「より多く」「より少なく」と訳した語は、それぞれ *magis*, *minus* である。ここでは数の多少ではなく、程度の多少を意味していると思われる。

¹⁵ Cf. *In De Trin.*, q. 6, a. 4, cor.

に何性である何性へと行き着く。従って、離在的諸実体はそれ自体として存在する何性そのものに他ならないのであるから、知性的魂は、身体と合一している時、離在的諸実体を知性認識することができると思われる¹⁶。

- (7) 更に。我々は自然本性的に、その果 (effectus) を通して諸々の原因 (causa) を知る。しかるに、可感的で質料的な諸事物の内には、離在的諸実体の何らかの果があるはずである。なぜなら、アウグスティヌスが『三位一体論』第三巻において述べていることから明らかな通り¹⁷、物体的事物は全て天使たちを通して神により宰領されているのだから。それ故、魂は、身体と合一している時、可感的な諸事物を通して離在的諸実体を知性認識することができるのである。
- (8) 更に。魂は、身体と合一している時、自分自身を知性認識する。なぜなら、アウグスティヌスが『三位一体論』第九巻において言っているように¹⁸、精神は自らを認識し、そして自らを愛するのだからである。しかるに、魂それ自身は本性的に、知性的な離在的諸実体に属するものである。それ故、魂は、身体と合一している時、離在的諸実体を知性認識することができる¹⁹。
- (9) 更に²⁰。事物の中には無駄に (frustra) 存在するものは何もない²¹。しかしながら、もし如何なる知性によっても知性認識されないのであれば²²、可知的なものであることは無駄であるように思われる²³。それ故、離在的諸実体は可知的なものなのであるから、我々の知性はそれらを知性認識することができるのである。

¹⁶ これはアヴェンバケ (Avenpace) が唱えた説であるとされている。Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 492, u. 363-87); Thomas, *SCG* III, 41 (Marietti, 2182).

¹⁷ Augustinus, *De Trinitate*, III, 4.

¹⁸ Augustinus, *De Trinitate*, IX, 3 et 4.

¹⁹ Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, arg. 9; *SCG* III, 46 (Marietti, 2227).

²⁰ Robb の英訳ではこの第九異論が抜けてしまっている。Robb 訳に第九異論として載せられているのは、実は第十異論である。ただし異論解答の方に欠落はない。

²¹ Cf. *In De Trin.*, q. 6, a. 4, arg. 4; *STI*, q. 88, a. 1, arg. 4; Aristoteles, *De anima* III, 432b21-22.

²² Leonina 版と Robb 版は intelligeretur, Marietti 版は intelligatur.

²³ Leonina 版は uideretur, Marietti 版と Robb 版は videtur.

(10) 更に。知性は可知的なものに対して、ちょうど視覚が可視的なものに対してあるがごとくにある。しかるに、我々の視覚はあらゆる可視的なものを知覚することができる。しかも、視覚それ自身は可滅的であるにもかかわらず、不可滅的なものさえも知覚することができるのである。それ故、我々の知性は、仮にそれが可滅的なものであるとしてさえ、不可滅的である離在的諸実体を知性認識することができる。なぜなら、それらの諸実体はそれ自体として可知的なものなのであるから²⁴。

【反対異論】

しかし反対に。哲学者（アリストテレス）が『魂について』第三巻において言っているように²⁵、魂は、表象像（*fantasmata*）なしには何も知性認識しない。しかるに、表象像を通して離在的諸実体が知性認識されることは不可能である²⁶。それ故、魂は、身体と合一している時、離在的諸実体を知性認識することはできない。

【解答（主文）】

解答。次のように言わなければならない。アリストテレスは『魂について』第三巻において、この問題に自ら後に答えを出すと約束していたのだが²⁷、今我々のもとにある彼の著作の中には、彼自身の答えは見当たらない²⁸。そのた

²⁴ Cf. *STI*, q. 88, a. 1, arg. 5.

²⁵ Aristoteles, *De anima* III, 431a16-17

²⁶ Rowan 訳では、この一文（*Set per fantasmata . . . separate.*）が抜けてしまっている。

²⁷ Aristoteles, *De anima* III, 431b19.

²⁸ Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, ad 8; *In De anima* III, 6 (Leonina, p. 234, u. 311-19). *In De anima* においてトマスは、ここでアリストテレスが答えを保留している理由は、この問題が離在的諸実体の存在や本質についての解明を必要としており、それは形而上学に属する考察だからであるとしている。そして、『形而上学』にもその答えが見つからないのは、その文書の

めに、彼の信奉者たちが様々な異なる仕方でのこの問題の²⁹解決を求めてゆくことになったのである。

或る人たちは³⁰、我々の魂は、身体と合一している時でさえ、離在的諸実体を知性認識することへと達することができるとした。そして、そこに人間の究極の幸福を置いている³¹。しかしながら、どのような仕方でも離在的諸実体の認識へと到達するかという点については意見が分かれる。

或る人たちは³²、我々の魂は離在的諸実体を認識することに達することができるが、その到達の仕方は、他の可知的なものを認識することに達する仕方とは異なるとしている³³。つまり他の可知的なものについては、我々は思弁的諸学において定義と論証を通して学び知るのであるが、離在的諸実体については、「能動知性」(intellectus agens)と我々との接合(continuatio)を通して知るのである。彼らによれば、能動知性とは、自然本性的に離在的諸実体を知性認識している、一つの離在的実体である。それ故、今我々が学知の能力態(habitus scientiarum)を通して知性認識を行っているような仕方でも、能動知性が我々と

全てがまだ翻訳されていないか、あるいは、恐らく死亡などの理由でアリストテレスがその著作を未完に残したからであろうと述べている。英訳: *Commentary on Aristotle's De Anima*, trans. Kenelm Foster and Silvester Humphries (Notre Dame: Dumb Ox Books, 1951), p. 233, 785; *A Commentary on Aristotle's De anima*, trans. Robert Pasnau (New Haven: Yale University Press, 1999), p. 388, 305-319/785.

²⁹ Leonina 版と Robb 版は huius questionis/hujus quaestionis, Marietti 版は huiusmodi quaestionis.

³⁰ アヴェロエスによれば、この説を唱えた人々とは、アフロディシアスのアレクサンドロス、テミスティウス、アヴェンバケ、そしてアヴェロエス本人である。Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 479-502).

³¹ Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, ad 8 (Leonina, u. 305-6); *In De Trin.*, q. 6, a. 4, arg. 3; *SCG* III, c. 41 (Marietti, 2181).

³² この説を唱えたのは、アフロディシアスのアレクサンドロス、テミスティウス、そしてアヴェロエスである。Cf. *STI*, q. 88, a. 1, cor. トマスはこの主文においてアリストテレス学徒たちの様々な説について批判的に論じているが、その論述の構成については Leonina 版における Bazan の註を参照 (p. 142, adn. ad u. 108)。

³³ Leonina 版は eo modo, Marietti 版と Robb 版は eodem modo.

一つになって、その能動知性を通して我々が知性認識を行うようになる時、我々は離在的諸実体を知性認識するようになるという³⁴。

彼らは、この能動知性が、それを通して我々が知性認識するようになるために、どのような仕方³⁵で我々と接合され得るのかを、次のように説明している。すなわち、哲学者（アリストテレス）の『魂について』第二巻から明らかとなり³⁶、我々が何かで在るとか何かを為すと言われる場合³⁷、常にそれは二つのことによる。その一つは形相的であり、もう一つは質料的である。例えば、我々が健康になると言われるのは³⁸、健康と身体の二つからそう言われるのであり、健康は身体に対して、ちょうど形相が質料に対するような関係にある。更に、我々が知性認識を行うのは、「能動知性」と「観照的な可知的なもの」（*intelligibilia speculatiua*）³⁹の両方を通してであるということも明らかである。と言うのも、我々は自然本性的に知っている諸原理と能動知性の両方を通して、結論の認識へと至るのだからである⁴⁰。それ故〔彼らによれば〕、必然的に、能動知性は「観照的な可知的なもの」に対して、ちょうど根源的能動者（*principale agens*）が道具に対するような、また形相が質料に対するような、あるいは現実態が可能態に対するような関係にある⁴¹。なぜなら、二つのもののうち、よ

³⁴ Leonina 版は *sequetur*、Marietti 版と Robb 版は *sequeretur*。

³⁵ Leonina 版と Robb 版は *modus*、Marietti 版は *modum*。

³⁶ Aristoteles, *De anima* II, 414a4-14.

³⁷ Leonina 版は *quandocumque dicimur*、Robb 版は *nos dicimur*、Marietti 版は *quando nos dicimur*。

³⁸ Leonina 版と Marietti 版は *dicimur*、Robb 版は *dicuntur*。

³⁹ Leonina 版は *intelligibilia speculatiua*、Robb 版と Marietti 版は *intelligibilia speculata*。Marietti 版を用いている Rowan 訳では *intelligible objects-known*、Robb 訳では *immediately cognized intelligible objects*（Robb の註 9 を参照）、Leonina 版を用いている Vernier 訳では *les intelligibles principes de la spéculation* とそれぞれ訳されている。ちなみに、これはアヴェロエスの用語である。Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 496, u. 505; p. 499, u. 560, 563, 584, et passim)。

⁴⁰ Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 496-97, u. 505-7)。

⁴¹ Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 499, u. 581-85; p. 497, u. 509-15)。また、トマス次のテキストも参照：*QDV*, q. 18, a. 5, ad 8; *SCG* III, c. 43 (Marietti, 2204); *STI*, q. 88, a. 1, cor.

り完全なものは、常にもう一方のものに対して、その現実態のような存在だからである⁴²。

更に〔彼らによれば〕、質料的なものを自らの内に受け取るものは全て、形相的なものをも自らの内に受け取っている⁴³。例えば、表面を持っている物体は、表面のいわば形相である色彩をも持っているのであり、また、色彩を受け取っている瞳は、色彩の現実態である光をも受け取っている。なぜなら、光によって色彩は現実態において可視的なものとなるからである⁴⁴。そして同様に可能知性は、「観照的な諸知識」(*intellecta speculatiua*) を能動知性から受け取れば受け取るほど、それだけより多く能動知性を受け取るのである。従って、可能知性がいつか全ての観照的な知識を受け取る時⁴⁵、その時可能知性は、能動知性を完全に自らの内に受け取るであろう⁴⁶。こうして能動知性は、可能知性の形相のようになり、その結果、我々と一つになるのである⁴⁷。それ故〔彼らによれば〕、ちょうど我々が今、可能知性を通して知性認識しているのと同様、その時には能動知性を通して知性認識するようになるのであり、全ての自然的事物だけでなく、離在的諸実体をも知性認識するようになるのである。

しかしながら、この点に関しては、この理論に従う人たちの間で意見が分かれている。すなわち、或る人たちは、可能知性は可滅的であるとしており、可

⁴² Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 499, u. 571-74).

⁴³ Leonina 版は *recipit in se illud quod est . . .* , Robb 版と Marietti 版は *recipit illud etiam quod est . . .* .

⁴⁴ アヴェロエスによれば、これはアヴェンパケの説である。Averroes, *Super De anima* II, 67 (Crawford, p. 231, u. 17-21).

⁴⁵ Leonina 版は *omnia speculatiua* , Robb 版と Marietti 版は *omnia speculata* .

⁴⁶ Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 500, u. 601-2).

⁴⁷ Robb 版と Marietti 版は *et per consequens unum nobis*. (イタリックは筆写)。Leonina 版はこの *unum* を外した読みを採っている (*et per consequens nobis*.)。ここではしかし、*ST I*, q. 88, a. 1, cor. の記述に基づき、*unum* を補って訳した。Vernier 訳は “*et par consequent comme notre forme*.” となっている。これはおそらくアヴェロエスのテキストに基づくものであると思われる。Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 501, u. 636-37: “*cum efficietur forma nobis*”). Leonina 版の Bazan による註を参照 (p. 143, adn. ad u. 155)。

能知性は決して能動知性も離在的諸実体も知性認識することができないと主張している⁴⁸。彼らによれば⁴⁹、我々は⁵⁰、能動知性と我々々が接合している状態において、能動知性それ自身を知性認識するようになるのであり、また、能動知性が形相として我々と一つになっている限りにおいて、その能動知性それ自身を通して他の離在的諸実体を知性認識するようになるのである⁵¹。他の人たちは、しかし、可能知性は不可滅的であるとしており、可能知性は能動知性および他の離在的諸実体を知性認識することができるかと主張している⁵²。

しかしながら、この理論はあり得ないし、また空虚である。更にはアリストテレスの意味するところにも反している。この理論があり得ない理由は、それが二つのあり得ない前提に立っているからである。その二つとはすなわち、能動知性が存在的に我々から分離した或る実体であるとしていること、そして、その能動知性を通して、形相を通して知性認識するような仕方では、我々が知性認識を行う⁵³としていることである。なぜなら、我々が形相としての何かによってはたらきを為せば為すほど、それだけ我々はそれによって何かをより現実態において在るものへともたらすのだからである。例えば、熱いものは、それが現実態において熱いもので在る限りにおいて、その熱によって熱くする⁵⁴。

⁴⁸ アヴェロエスによれば、これは、アレクサンドロスおよび、質料的知性が生成消滅するものであるとする全ての人の主張である。Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 498, u. 553-54): "Alexander et omnes opinantes intellectum materiale esse generabilem et corruptibilem." トマスの次のテキストも参照：QDV, q. 18, a. 5, ad 8 (Leonina, u. 293-302); SCG III, c. 42 (Marietti, 2195).

⁴⁹ Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 484, u. 140-42).

⁵⁰ Cf. ST I, q. 88, a. 1, cor. そこでは nos〔我々〕の代わりに homo〔人間〕という語が用いられている："ut ipse imponit Alexandro, intellectus possibilis nunquam intelligat substantias separatas (propter hoc quod ponit intellectum possibilem corruptibilem), sed homo intelligat substantias separatas per intellectum agentem." (イタリックは筆写)。

⁵¹ Leonina 版は intelligemus, Robb 版と Marietti 版は intelligimus.

⁵² QDV, q. 18, a. 5, ad 8 (Leonina, u. 313-31) によれば、これはテミスティウスとアヴェロエスの主張である。

⁵³ Leonina 版は intelligamus, Robb 版と Marietti 版は intelligimus.

⁵⁴ トマスは ST において次のように述べている。はたらきを為すものがそれでもって形相的にはたらくところのものは、はたらきを為すものの形相であり、はたらきを為すものの現

何ものも、それが現実態において在る限りにおいてでなければ、はたらきを為さないからである⁵⁵。それ故、それによって何らかのものが形相的に作用したりはたらきを為したりするところのものは⁵⁶、そのものと存在的に合一していなければならない⁵⁷。存在的に分離している二つの実体のうちの一方が、他方を通して形相的にはたらきを為すことは不可能である。従って、もし能動知性が存在的に我々から分離した何らかの実体であるとすれば、我々が形相因的な仕方で (formaliter) それによって知性認識を行うことは不可能である。ただし、能動因的な仕方 (active) で我々がそれによって知性認識することは可能である⁵⁸。例えば、太陽の照明によってという意味で、我々は太陽によって見ると言われる場合のように⁵⁹。

また、上に述べた理論が空虚であるのは、その理論のために挙げられている諸々の根拠が、必然性をもってその結論を導いていないからである。このことは二つの点から明らかである。第一に、もし彼らが主張するように能動知性が⁶⁰ 離在的実体であるならば、能動知性の「観照的な可知的なもの」⁶¹ に対する関係は、光の色彩に対する関係のごときものではなく⁶²、むしろ、照明している

実態でなくてはならない (Cf. *STI*, q. 88, a. 1, cor.)。また、何かが現実態に導かれ得るためには、何らかの現実態に在るものによらなければならない。例えば可能的に熱いものである木材を現実的に熱いものたらしめるのは、火という現実的に熱いものなのである (Cf. *STI*, q. 2, a. 3, cor.)。

⁵⁵ Cf. *In De sensu* I, c. 9, II (Leonina, p. 55, u. 178-79); *In De anima* III, c. 1 (Leonina, p. 206, u. 296-97)。

⁵⁶ Leonina 版は id quo, Robb 版は illud quo, Marietti 版は id quod。

⁵⁷ Cf. *SCG* III, c. 42 (Marietti, 2197, f); *In De anima* III, c. 4 (Leonina, p. 220, u. 104-6); *STI*, q. 88, a. 1, cor. (“Primo quidem quia . . .”)

⁵⁸ Leonina 版は quod ea intelligeremus, Robb 版と Marietti 版は ut ea intelligeremus。

⁵⁹ Leonina 版は sole ut illuminante, Robb 版と Marietti 版は sole illuminante。

⁶⁰ Leonina 版は intellectus, Robb 版と Marietti 版は intellectus agens。ここでは文脈から後者に従った。

⁶¹ Leonina 版は intelligibilia speculatiua, Robb 版と Marietti 版は intelligibilia speculata。Leonina 版はこのテキストでは一貫して intelligibilia speculatiua となっている。以降この用語については異同の註記を省略する。

⁶² Cf. Aristoteles, *De anima* III, 430a15-16。

太陽の色彩に対する関係のごときものであることになる⁶³。従って、可能知性は、「観照的な可知的なもの」を受け取ることを通して、その能動知性の実体と（*substantie eius*）結合するわけではなく⁶⁴、その或一つの効力と（*alicui effectui ipsius*）結合するのである。それはちょうど目が、諸々の色彩を受け取ることを通して、太陽の実体と合一するわけではなく、その光と合一するのであると同様である⁶⁵。第二に、もしたとえ可能知性が、「観照的な可知的なもの」を受け取ることを通して、何らかの仕方でも能動知性の実体そのものと結合されるのだとしても、そのことから、可能知性があらゆる「観照的な可知的なもの」を受け取ることによって、すなわち⁶⁶、諸表象像から抽象され、論証の諸原理を通して獲得される全ての可知的なものを受け取ることによって、能動知性の実体と完全に結合されるということは帰結しない。このことは、こうして受け取られた「観照的な可知的なもの」の全体が、能動知性の能力およびその実体と対等であることが証明されない限り、帰結しないのである⁶⁷。だが、それは明らかに虚偽である。なぜなら、もし能動知性が離在の実体なのだとなれば、それは、それを通して可知的なものとなる、自然物における全てのものよりも、存在するものの中で、より上位の階級に属するからである。

また、どうして彼ら自身が自らの理論の過ちに気づかなかったのか、不思議である⁶⁸。と言うのも彼らは、一つや、二つや、三つの⁶⁹「観照的な可知的なも

⁶³ Cf. Avicenna, *Liber de anima*, V, 5 (S. Van Riet ed., *Avicenna Latinus Liber de anima seu Sextus de naturalibus*, IV-V (Leiden: E.J. Brill, 1968), p. 127, u. 36-37).

⁶⁴ Leonina 版は *coniungeretur*, Robb 版と Marietti 版は *conjungitur/coniungitur*.

⁶⁵ Cf. *STI*, q. 88, a. 1, cor. (“Secundo quia . . .”).

⁶⁶ Leonina 版にのみ、ここに *scilicet* が挿入されている。

⁶⁷ Cf. *SCG* III, c. 43 (Marietti, 2211, b); *STI*, q. 88, a. 1, cor. (“Tertio quia . . .”).

⁶⁸ Leonina 版は *mirum est etiam quomodo*, Marietti 版は *mirum est etiam quod*, Robb 版は *manifestum est igitur quod*.

⁶⁹ Leonina 版にのみ、ここに *uel tria* が挿入されている。

の」を通して〔能動知性が〕我々と合一する⁷⁰と主張しているにも拘らず、彼らによれば、このことから、我々がその他全ての「観照的な可知的なもの」を知性認識するということは帰結しないのである。さて、離在的な知性的諸実体がこれらの「観照的な可知的なもの」と呼ばれるものよりも、それらの一つや二つや幾つかどころか⁷¹、それら全部を一度に集めたものよりも、遙かに卓越したものであることは明らかである。なぜなら、これらは全て同じ類に属し、同じ仕方でも可知的なものでしかないが、離在的諸実体はそれよりも上位の類に属し、上位の仕方でも知性認識されるのだからである⁷²。それ故、たとえ能動知性が、形相であることに基づいて、またこれらの可知的なものへの能動因であることに基づいて我々と接合されるとしても、そのことから、離在的諸実体を知性認識するということに基づいて能動知性が我々と接合されるとということは帰結しないのである。

更に、この理論がアリストテレスの意図に反しているということも明らかである。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第一巻において、幸福とは徳に対する能力が欠けていない全ての人に達成可能な、或る共通的な善であると言っている⁷³。ところが、彼らが「観照的な可知的なもの」と呼んでいるこれらのものを全て知性認識することは、人間には不可能であるか⁷⁴、あるいは、神でありかつ人であったキリスト以外には⁷⁵、この世の生の状態においては決し

⁷⁰ Leonina 版と Robb 版は uniretur (3 人称単数), Marietti 版は unirentur (3 人称複数)。この違いにより、Marietti 版に基づく Rowan の英訳では次のようになっている: “all intelligible objects-known were united by one or two of these objects. . .”

⁷¹ Leonina 版と Robb 版は excedant, と Marietti 版は excedunt.

⁷² Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, cor. (Leonina, u. 165-69); *SCG* III, c. 43 (Marietti, 2211, b).

⁷³ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, I, 9, 1099b18-20. Cf. *SCG* III, c. 44 (Marietti, 2215); *STI*, q. 88, a. 5, cor. (“Quarto, quia . . .”).

⁷⁴ Cf. *SCG* III, c. 44 (Marietti, 2214).

⁷⁵ Cf. *QDV*, q. 10, a. 11, ad 3 (Leonina, u. 230-46)。トマスによれば、最初の人間であるアダムもまた、あらゆる物事についての知を有していた。Cf. *STI*, q. 94, a. 3; *QDV*, q. 18, a. 4, cor. (Leonina, u. 208-11) et ad 10.

で誰も達成しなかったほどに稀なことである⁷⁶。それ故、このような知識が人間の幸福のために必要とされることはあり得ない。しかるに、哲学者（アリストテレス）が『ニコマコス倫理学』第十巻において言っているように⁷⁷，人間の究極の幸福は，最も高貴な可知的なものを知性認識することにおいて成立する⁷⁸。それ故，人間の幸福がそこにおいて成立する限り，最も高貴な可知的なものである離在的諸実体を知性認識するために，人が全ての「観照的な可知的なもの」を知性認識する必要はないのである⁷⁹。

また，上に述べた理論がアリストテレスの意図に反していることは，別の点からも明らかである。『ニコマコス倫理学』第一巻には，幸福は完全な徳に基づくはたらきの内に成立すると述べられている⁸⁰。それ故，『ニコマコス倫理学』第一巻の終わりに彼自身が述べているとおり⁸¹，幸福がどこに成立するのかを明確に見極めるためには，全ての徳について明確にする必要があると彼は考えていたのである。それらの徳のうち或るものは倫理的な徳と呼ばれており，剛毅や節制などがそれにあたる。他方⁸²，或るものは知性的な徳と呼ばれ，彼によればそれには，知恵，学知，理解，思慮，技術の五つがある⁸³。そして，第十巻において明らかのように⁸⁴，アリストテレスによれば，これらの中で最高

⁷⁶ Leonina 版は *perrarum, quod nunquam alicui homini*, Robb 版は *perrarum quod nulli unquam homini*, Marietti 版は *rarum quod nulli unquam homini*.

⁷⁷ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, X, 7, 1077a12-21.

⁷⁸ Cf. *SCG* III, c. 44 (Marietti, 2216); *STI*, q. 88, a. 1, cor. (“Quinto, quia . . .”); *In Ethic.*, X, 10 (Leonina, u. 80-93; Marietti, 2087).

⁷⁹ Robb 版には，*aliquis intelligat et intelligibilia speculata omnia* というように *et* が挿入されている（イタリックは筆者）。

⁸⁰ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, I, 7, 1098a16-17.

⁸¹ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, I, 13, 1102a5-6.

⁸² Leonina 版と Marietti 版は *autem*, Robb 版は *enim*.

⁸³ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, I, 13, 1103a4-6. 知性的な徳（思考の徳）については『ニコマコス倫理学』第六巻において論じられている。なお，ここに知恵，学知，理解，思慮，技術と訳した語は *sapientia, scientia, intellectus, prudentia, ars* である。

⁸⁴ Leonina 版と Robb 版は *ut in X apparet*, Marietti 版は *ut in textu apparet*.

の徳は知恵 (sapientia) であり⁸⁵、この知恵のはたらきの内に究極の幸福が成立するとしなければならない⁸⁶。しかるに、『形而上学』の冒頭において明らかなように、知恵とはまさに第一哲学そのものである⁸⁷。それ故、次のことが帰結する。アリストテレスの意図によるならば、この世において獲得可能な人間の究極的な幸福とは、哲学の諸原理⁸⁸を通して獲得され得るような、離在的諸実体についての認識なのであって⁸⁹、或る人たちが空想したような⁹⁰〔能動知性との〕接合の道を通して獲得されるようなものではないのである。

このため、別の理論も生じた。それは、人間の魂は哲学の諸原理を通して⁹¹離在的諸実体そのものの認識へと到達することが可能であるとするものである⁹²。

⁸⁵ Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, X, 7, 1177a12-1177b1; X, 8, 1179a22-32. Cf. *In Ethic.* X, 13 (Leonina, u. 127-44; Marietti, 2134-36).

⁸⁶ Leonina 版は oportet, Robb 版と Marietti 版は dicit.

⁸⁷ Aristoteles, *Metaphysica* I, 2, 982b7-10.

⁸⁸ Leonina 版と Robb 版は principia philosophie/philosophiae, Marietti 版は principia Philosophiae.

⁸⁹ トマスは人間の幸福を二通りに区別している。一つは完全な幸福であり、もう一つは不完全な幸福である。人間の究極の完全なる幸福とは、神の本質を観ることにのみ成立する。それに対して、観照的な諸学の考究によって達成される幸福は、不完全な幸福である。また、離在的諸実体を認識することにおいては、観照的な諸学の考究におけるよりもより上位の幸福が獲得され得るとされるが、それもやはり不完全な幸福でしかない。Cf. *ST* I-II, q. 3, aa. 6-8; *In De Trin.*, q. 6, a. 4, ad 3: “. . . duplex est felicitas hominis: una imperfecta, que est in uia; de qua loquitur Philosophus, et hec consistit in contemplatione substantiarum separatarum per habitum sapientie, imperfecta tamen, et tali qualis in uia est possibilis, non ut sciatur ipsarum quiditas. Alia est perfecta in patria, in qua ipse Deus per essentiam uidebitur et alie substantie separate; set hec felicitas non erit per aliquam scientiam speculatiuam, set per lumen glorie.” (「人間の幸福には二つある。一つはこの世におけるもので不完全なものであり、これについて哲学者は語っているのであるが、この幸福は、知恵という所有態によって諸々の分離実体を観想することに存する。しかし、この観想は不完全で、この世において可能な類のものであって、それらの実体の何性が知られるようなものではない。もう一つは天国における完全な幸福で、そこでは、神自身が本質によって見られるであろうし、また他の諸々の分離実体も見られるであろう。しかし、かかる幸福は、何か或る観照的学知によるものではなく、むしろ栄光の光によるものである」長倉久子訳『トマス・アクィナス 神秘と学知』創文社、1996年)。

⁹⁰ Leonina 版と Robb 版は quem aliqui, Marietti 版は quam aliqui.

⁹¹ Leonina 版と Robb 版は per principia philosophie/philosophiae, Marietti 版は per principia Philosophiae.

このことを証明するために提唱者たちは次のように論じている。人間の魂は自然的物から⁹³それらの何性（quidditas）を抽象することができ、そして、それらを知性認識することができる。このことは明らかである。そしてこのことは、我々が或る質料的物は何であるかを知性認識する時にいつも生じる⁹⁴。従って、抽象されたその何性が、もしもまだ純粋な何性ではなく、何性を有している物である場合には⁹⁵、我々の知性は、更にそれを抽象することができる。だが、この抽象の過程が無限に続くことはあり得ないのだから、我々の知性は、何らかの単純な何性（quidditas simplex）を知性認識することへといつか行き着くであろう。そして〔彼らによれば〕、行き着くこの観照を通して、我々の知性は離在的諸実体を知性認識するであろう。それらの実体は⁹⁶、単純な何性以外の何ものでもないのだから。

この理論は、しかしながら、全くもって不適當である。なぜなら、まず第一に、質料的諸事物の何性は離在的な何性とは別の類に属するのであり⁹⁷、別の存在の仕方を有しているのである。それ故、我々の知性が質料的諸事物の何性を知性認識するということから、我々の知性が離在的な何性を知性認識するということは帰結しないのである。更には⁹⁸、知性認識された様々な何性は、それぞれ種的に異なっているのである。そのため、ある一つの質料的事物の何性を知性認識している人は、他の事物の何性を知性認識しているのではない。例えば、石が何であるかを知っている人は、動物が何であるかを知っているの

⁹² アヴェロエスによれば、これはアヴェンパケの唱えた説である。Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 494, u. 430-33). Cf. *SCG* III, c. 41 (Marietti, 2182); *STI*, q. 88, a. 2, cor. (“sicut Averroes narrat . . .”).

⁹³ Leonina 版と Robb 版は a rebus naturalibus, Marietti 版は a rebus materialibus.

⁹⁴ Leonina 版は quotienscumque, Robb 版は quotiens, Marietti 版は quoties.

⁹⁵ Leonina 版は set est res habens quidditatem, Robb 版と Marietti 版は sed etiam res . . . (イタリックは筆写)。

⁹⁶ Leonina 版と Robb 版は que/quae, Marietti 版は quod.

⁹⁷ Cf. Averroes, *Super De anima* III, 36 (Crawford, p. 493, u. 400-401); Thomas, *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, u. 77-82); *Ibid.*, a. 4, cor. (Leonina, u. 147-53); *QDV*, q. 10, a. 11, cor. (Leonina, 165-72); *SCG* III, c. 41 (Marietti, 2184); *STI*, q. 88, a. 2, ad 4.

⁹⁸ Leonina 版と Robb 版は iterum, Marietti 版は item.

ではない。それ故、仮にもし離在的な何性が質料的な何性と同じ性質（ratio）のものであったとしても、それでもなお、これらの質料的諸事物の何性を知性認識する人は離在的諸実体の何性をも知性認識するということにはならないのである。もしかして、離在的諸実体はこれらの可感的諸事物の形象（species）であると主張したプラトンの説に従うのでない限りは⁹⁹。

それ故、我々は、以上の理論とは異なり、次のように言わなければならない¹⁰⁰。人間の知性的魂は、身体との合一により、表象像へと傾いた視野（aspectus）を持つ¹⁰¹。それ故、表象像から受け取られた形象を通してより他には、何かを知性認識するために形相づけられることはない。この主張には、『天上位階論』第一巻におけるディオニシウスの言葉も共鳴している。神の光は、諸々の聖なるとばりの多様さによって覆い隠されることなく我々を照らすことはありえない¹⁰²、と彼は述べているからである¹⁰³。それ故、魂は、身体と合一している間、離在的諸実体の認識にまで達することが可能であるが、それは、諸表象像から受け取られた形象によって手引きされ得る限度内においてである。しかしこの

⁹⁹ Cf. Plato, *Timaeus*, 52A; Aristoteles, *Metaphysica* I, 6, 987b1-14; Thomas, *SCG* II, c. 92 (Marietti, 1791); *Ibid.*, III, c. 41 (Marietti, 2185-86); *ST I*, q. 88, a. 2, cor. (“Quod quidem efficaciter . . .”).

¹⁰⁰ Leonina 版と Marietti 版は dicendum est quod, Robb 版は dicendum quod.

¹⁰¹ Cf. *QDA* q. 3, ad 19; *CT*, I, c. 85 (Leonina, u. 156-63); *SCG* III, c. 45 (Marietti, 2225, c); *ST I*, q. 88, a. 1, cor. (“Sed secundum Aristotelis sententiam . . .”).

¹⁰² Pseudo-Dionysius Areopagita, *De caelesti hierarchia* I, 2: 「神性の根源の光線がわれわれを照らすということは、その光線が神秘のうちに多種多様な聖なる帳に隠れて、父としてわれわれを摂理しつつその帳によって（われわれの）本性に合わせて適切に表れる、ということと別のことではありえないのだからである。」今義博 訳 『中世思想原典集成』3（平凡社、1994年）pp. 355-36.

¹⁰³ Cf. *QDA*, q. 15, cor.; *QDV*, q. 18, a. 5, cor.; *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, 94-106). *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, u. 94-99) において、トマスは次のように述べている: “Vnde de substantiis illis immaterialibus secundum statum uiae nullo modo possumus scire quid est, non solum per uiam naturalis cognitionis, set etiam nec per uiam reuelationis; quia diuine reuelationis radius ad nos peruenit secundum modum nostrum, ut Dionysius dicit.”（「従って、かの諸々の非質料的実体に関しては、現世の境遇では、単に自然的認識の道によるのみならずまた啓示の道によっても、何であるかを知ることが決してできない。啓示の道によっても不可能であるのは、ディオニシウスが言っているように、神啓示の光線は、我々の在り方に適した仕方であらうからである。」長倉 訳）。

認識は、離在的諸実体についてそれらが「何であるか」(quid sunt)が¹⁰⁴知性認識されるほどのものではない¹⁰⁵。なぜなら、それらの諸実体は、こうした可知的諸形象との対比を全く超越しているからである。この仕方によって我々が離在的諸実体について何とか知り得ることは、〔それらが何であるかではなく〕それらが「存在する」(quia sunt)ということにすぎない¹⁰⁶。それはちょうど我々が、欠陥のある諸々の果(effectus)を通して卓越している諸原因へと到達し、それらの原因について、それらが存在するということだけを知ると同様である。そして、そういう卓越した諸原因が存在するということを知る時、我々は同時に、それらがその果とは同じ性質のものではないということを知る。これはつまり、それらについて、それらが何であるかを知るのではなく、むしろ、それらが何でないかを知るということである。そしてこのことに基づいて、次

¹⁰⁴ Leonina 版は quid sunt, Robb 版と Marietti 版は quid sint.

¹⁰⁵ Cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, 13, 78a22; Thomas, *In Post.*, I, 23 (Leonina, u. 1-53; English trans., R. Berquist, p. 105-6, a); *QDV*, q. 10, a. 11, ad 5; *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, u. 109-113); *SCG* III, c. 41 (Marietti, 2189); *STI*, q. 88, a. 2, ad 2; *QDM*, q. 16, a. 11, cor. (Leonina, u. 174-80: "Set horum trium..."). *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, u. 106-111)において、トマスは次のように述べている: "... uia autem que est per sensibilia non sufficit ad ducendum in substantias immateriales secundum cognitionem quid est. Et sic restat quod forme immateriales non sunt nobis note cognitione quid est, sed solummodo cognitione an est." (「可感的なものによる道は、何であるかの認識に関して非質料的諸実体にまで導いていくには十分ではない。従って、結論として、非質料的諸形相は、我々にとって、<何であるか>の認識に関しては知られるものではなく、ただ単に<在るか>の認識に関してのみそうであることになる」長倉 訳)。

¹⁰⁶ すなわち、トマスによれば、この世の生において我々の知性が知り得るのは、離在的諸実体が一体何であるかという、離在的諸実体の何性もしくは本質の理解ではなく、ただそれらの諸実体が現実的に存在するという事実だけである。トマスは神の認識について論じている箇所においても同様のことを述べている(*STI*, q. 12, a. 11)。山田晶はその箇所の註において次のように解説している:「人間の魂は、現世においては、肉体を質料としてそれと結合し、それにおいて自己の存在を有するものとして存在しているから、かかる存在者たる人間知性に自然本性的に適合した認識対象は、質料において存在を有する事物(すなわち、「可感的質料的事物」res materialis sensibilis)の本性である。知性はかかる事物の本性を、感覚の所与たる表象から抽象するという仕方でも認識する。次に、かかるものの認識を通して、間接的な仕方でも、可感的個物、自己の魂、純粹知性たる天使の存在、神の存在(つまり「神が存在する」ということ)まで認識することができる。しかし神の本質の認識にはけっして達することができないのである。」山田晶編訳『世界の名著トマス・アクィナス』(中央公論社, 1975年), p. 359, 註9。

のことはある意味、真理である。すなわち、質料的諸事物から抽象した諸々の何性を知性認識する限りにおいて、我々の知性は、それら諸々の何性へと自らを向けることによって、離在的諸実体を知性認識することが可能なのであり、このようにして、それらの諸実体が、質料から抽象された諸々の何性それ自体と同じように、非質料的であるということを知るのである。そしてこのような仕方では、我々の知性は、内省的なはたらき（*consideratio*）を通して可知的な離在的諸実体の認識へと導かれる。また、我々はこの世の生において離在的諸実体を、それらが何であるかを理解することによって知ることはできず、ただそれらが何でないかを知るのみだとしても、それは驚くべきことではない¹⁰⁷。なぜなら、我々は、諸々の天体の何性と本性もまた、これ以外の仕方では知り得ないのだからである。それ故アリストテレスも『天体論』第一巻において、天体が重くもなく軽くもなく、生成することも消滅することもなく、また反対対立を持つものでもないということを示しながら、そのことを説明しているのである¹⁰⁸。

¹⁰⁷ Cf. *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, u. 159-65): 「これらの〔非質料的〕諸実体については、我々は、類の認識の代わりに、諸々の否定を通しての認識をもつのである。例えば、こうした諸実体が非質料的で非物的なものであり、形姿をもたず、その他こうした否定的なものであると知る場合である。そして、これらの実体について、否定的認識をより多くもてばもつほど、それだけ一層、我々がそれらについてもつ認識は曖昧さの少ないものである」（長倉 訳）。

¹⁰⁸ Aristoteles, *De caelo*, I, 3, 269b30, 270a12-22. Cf. *In De Trin.*, q. 6, a. 3, cor. (Leonina, u. 168-72); *STI*, q. 88, a. 2, ad 2: 「諸学において上位の事物が取りあつかわれるのは、なによりも除去・否定の道によってである。事実、アリストテレスは諸々の天体を扱うにあたってやはりこのようにして、下界の物体の諸特性の否定を通じてその解明をおこなっているのである。いわんや、だから、非質料的諸実体の場合にあっては、これらのものがその何性の把握というごとき仕方でもって我々の認識するところとなることはありえない。諸学においてこれらのものに関する教えが我々に与えられるのも、むしろ除去・否定の道によってであり、また質料的諸事物に対する何らかの関わりあいを通路とすることによる」（大鹿 訳）。

【各異論への解答】

- (1) 第一の論に対しては次のように言わなければならない。人間の魂の自然的な能力が自ら達する目的とは、上に述べたような仕方によって¹⁰⁹、離在的諸実体を認識することである。この目的達成のためには、身体と合一していることは妨げにならない。そして同様にまた、このような仕方での離在的諸実体の認識の内に、自然的な能力によって到達可能な人間の究極的幸福はある。
- (2) 従って、第二の論に対する解答も明らかである。
- (3) 第三の論に対しては次のように言わなければならない。可能知性は、ますます多く知性認識して行くことによって¹¹⁰、連続的に可能態から現実態へと導かれるのであるが、しかしこのような現実化あるいは生成の行き着く目的は、最高の可知的なもの、すなわち神の本質を知性認識することにある。しかしながら、この目的へは、自然的な力によって到達することはできず、ただ恩寵によるしかない¹¹¹。
- (4) 第四の論に対しては次のように言わなければならない。確かに、〔抽象によって〕離在的なものにして、それを知性認識することの方が、〔初めから〕離在的であるものを知性認識することよりも難しい。ただしそれは、同じ類の事柄について取りあつかう場合なのであって、もし別の類の事柄についてなのであれば¹¹²、そうである必然性はない。なぜなら、離在的なものの一つを知性認識することだけでも、それは、抽象することによってその

¹⁰⁹ 主文 (Leonina, u. 318-45) を参照。

¹¹⁰ Leonina 版と Marietti 版は magis ac magis, Robb 版は magis et magis.

¹¹¹ Cf. *QDV*, q. 10, a. 11, cor. (Leonina, u. 181-89) et ad 7; *STI*, q. 12, a. 4, cor. et ad 3. また、上の註 89 における *In De Trin.*, q. 6, a. 4, ad 3 の引用をも参照。

¹¹² Leonina 版と Marietti 版は set/sed si de aliis, Robb 版は sed de aliis.

他諸々のものを知性認識するよりも¹¹³、より以上に困難なことであり得るからである¹¹⁴。

- (5) 第五の論に対しては次のように言わなければならない。過度に可感的なものに対して、感覚は二通りの仕方です支障をきたす。一つは、それが感覚との適合性を超えているために、把捉することができない場合である。もう一つは、過度に可感的なものによって感覚の器官が破損されてしまい、そのために¹¹⁵その後、より少なく可感的であるものを知覚できなくなる場合である。知性は、過度に可知的なるものによって破損され得る器官というものを持たないけれども、何らかの卓越した可知的なものが、それを知性認識することにおいて、我々の知性の能力を超えているということはあり得るのである¹¹⁶。そして離在的諸実体とは、まさにそのような可知的なものなのであり、それは、身体と合一している限りにおいて表象像から分離された形象を通して完成されるような本性を有する、我々の知性の能力を超えている¹¹⁷。しかしながら、もしも我々の知性が離在的諸実体を知性認識するのだとしたら、我々の知性はその他のものを、より少なくではなく、より多く知性認識できるであろう¹¹⁸。
- (6) 第六の論に対しては次のように言わなければならない。すでに明らかにされたように¹¹⁹、質料的諸事物から抽象された諸々の何性は、それらを通し

¹¹³ Leonina 版と Robb 版は *et intelligendo* , Marietti 版は *et in intelligendo* .

¹¹⁴ Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, ad 4: “Ex parte cognoscibilis difficilius est facere aliquid intelligibile et intelligere ipsum quam intelligere id quod est in se intelligibile; sed ex parte cognoscentis potest esse difficilius ad cognoscendum id quod est in se intelligibile, et hoc convenit intellectui humano propter hoc quod non est proportionatus ad intelligendum naturaliter essentias separatas ratione iam dicta.”

¹¹⁵ Leonina 版は *et hoc est quia* , Marietti 版と Robb 版は *propter hoc quia* .

¹¹⁶ Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, ad 7.

¹¹⁷ Leonina 版は *intellectus qui* , Marietti 版と Robb 版は *intellectus nostri, qui* .

¹¹⁸ Cf. Aristoteles, *De anima* III, 4, 429a29-b5; Thomas, *QDV*, q. 18, a. 5, arg. 7 et ad 7; *In De anima* III, 1 (Leonina, u. 237-74).

¹¹⁹ 主文 (Leonina, u. 318-26) を参照。

て離在的諸実体が何であるのかを我々が認識することができるためには、不十分である¹²⁰。

- (7) 第七の論に対しても同様のことを言わなければならない。上に述べたように¹²¹、欠陥のある果 (effectus deficientes) は、それらを通して原因についてそれが何であるかが知られるためには、不十分である。
- (8) 第八の論に対しては次のように言わなければならない。我々の可能知性は自分自身を、自らの本質を把握することによって直接的に知性認識するのではなく、表象像から受け取った形象を通して知性認識するのである。それ故に、哲学者 (アリストテレス) は『魂について』第三巻において、可能知性は、その他のものと同様の仕方でも知知的であると言っている¹²²。その理由は、『形而上学』第九巻において述べられているように、如何なるものも、それが知知的なものであるのは、可能態にある限りにおいてではなく、現実態にある限りにおいてなのだからである¹²³。従って、可能知性はただ可能態において知知的なものなのであるから¹²⁴、それによって現実態となるところの自らの形相、すなわち表象像から受け取った形象を通して以外には¹²⁵、知性認識されることができないのである¹²⁶。それは、その他のあらゆる事物もまた、自らの形相を通して知性認識されるのと同様であ

¹²⁰ Cf. *QDV*, q. 18, a. 5, ad 6; *SCG* III, c. 41 (Marietti, 2189).

¹²¹ 主文 (Leonina, u. 326-32) を参照。

¹²² Aristoteles, *De anima* III, 4, 430a2-3. Cf. *In De anima* III, 3 (Leonina, u. 65-86); *SCG* II, c. 98 (Marietti, 1828); *Ibid.*, III, c. 46 (Marietti, 2233).

¹²³ Aristoteles, *Metaphysica* IX, 9, 1051a29-33. Cf. *In De anima* III, 3 (Leonina, u. 87-106); *ST* I, q. 87, a. 1, cor.

¹²⁴ Leonina 版と Robb 版は sit potentia tantum, Marietti 版は sit in potentia tantum.

¹²⁵ Leonina 版は a fantasmatis accepta, Marietti 版と Robb 版は a phantasmatis abstracta.

¹²⁶ Cf. *ST* I, q. 87, a. 1, ad 3: "Et ideo intellectus humanus, qui fit in actu per speciem rei intellectae, per eandem speciem intelligitur, sicut per formam suam." (「それゆえ、人間の知性は、知性認識される事物の形象でもってはじめて現実態におけるものとなるわけであるから、この同じ形象を自らの形相のごとくにして、こうした形象を通じてはじめてそれは知性認識される」大鹿 訳)。

る¹²⁷。そして、次のこともまた¹²⁸、魂の全ての能力において (in omnibus potentiis anime) 共通的である。すなわち、諸々の活動 (actus) は諸対象 (obiecta) を通して知られ¹²⁹、諸々の能力 (potentie) は諸活動を通して知られ、そして魂は自らの諸能力 (potentie) を通して知られる¹³⁰。従っ

¹²⁷ Cf. *ST I*, q. 87, a. 1, ad 3: “Sicut enim sensus in actu est sensibile, propter similitudinem sensibilis, quae est forma sensus in actu; ita intellectus in actu est intellectum in actu, propter similitudinem rei intellectae, quae est forma intellectus in actu.” (「けだし、ちょうど現実態における『感覚』が『可感的なるもの』と一つであるのは『可感的なるもの』の似姿のゆえであり、こうした似姿が現実態における感覚の形相となっているのであるように、それと同じく、現実態における『知性』が現実態における『知性認識されるもの』と一つであるのは、『知性認識される事物』の似姿のゆえであり、こうした似姿がつまりは現実態における知性の形相たるのである」大鹿 訳)。

¹²⁸ Leonina 版は hoc est etiam commune, Marietti 版と Robb 版は hoc est commune.

¹²⁹ Cf. *QDV*, q. 15, a. 2, cor. (Leonina, u. 176-81); *SSS II*, d. 38, q. 1, a. 4, arg. 1 (Mandonnet, p. 976).

¹³⁰ Cf. *ST I*, q. 87, a. 3, cor.: “Est autem alius intellectus, scilicet humanus, qui nec est suum intelligere, nec sui intelligere est obiectum primum ipsa eius essentia, sed aliquid extrinsecum, scilicet natura materialis rei. Et ideo id quod primo cognoscitur ab intellectu humano, est huiusmodi obiectum; et secundario cognoscitur ipse actus quo cognoscitur obiectum; et per actum cognoscitur ipse intellectus, cuius est perfectio ipsum intelligere. Et ideo philosophus dicit quod obiecta praecognoscuntur actibus, et actus potentiis.” (「さらにまた、これらとは別な知性、すなわち人間の知性があるのであって、これは、『知性認識』というはたらきそのものであるごとき知性でもないし、また、その『知性認識』のはたらきの第一の対象は、その本質そのものではなく、却って何らかの外的なるもの、すなわち、質料的事物の本性なのである。それゆえ、人間の知性によって第一に認識されるところのものはこのような対象であり、そして二次的に『こうした対象がそれでもって認識されるところの活動』が認識され、さらにこの活動を通じて知性 つまり知性認識というはたらきがその完全態であるごとき そのものが認識される。アリストテレスが、対象は活動に先だって認識され、活動は能力に先だって認識される、と語る所以である」大鹿 訳)。 Cf. Aristoteles, *De anima II*, 4, 415a16-22; *In De anima II*, 6 (Leonina, p. 94, u. 173-86): “Sciendum est autem quod intellectus possibilis noster est in potencia tantum in ordine intelligibilium, fit autem actu per formam a fantasmatis abstractam; nichil autem cognoscitur nisi secundum quod est actu; unde intellectus possibilis noster cognoscit se ipsum per speciem intelligibilem, ut in III habebitur, non autem intuendo essentiam suam directe. Et ideo oportet quod in cognitione anime procedamus ab hiis que sunt magis extrinseca, a quibus abstrahuntur species intelligibiles, per quas intellectus intelligit se ipsum, ut scilicet per obiecta cognoscamus actus et per actus potencias, et per potencias essentiam anime.”

て、同様に、知性的魂も自らの可知的对象を通して知られる¹³¹。しかしながら¹³²、表象像から受け取られた形象は、離在的実体の形相ではないのであり、を通して可能知性が認識されるのと同じような仕方でも、を通して離在的実体が認識されることは不可能である。

- (9) 第九の論に対しては次のように言わなければならない。その論理は二つの点から全く無効である。第一に、諸々の可知的なものは、それらを知性認識する知性のために存在しているのではない。むしろ、それらの可知的なものは、諸々の知性の目的であり、完全性なのである。従って、もし他の知性によって知性認識されないような或る可知的実体があったとしても、その理由で、その実体が無駄に存在しているということにはならない。なぜなら、無駄に (*frustra*) ということは、到達することのない目的へと向かうことについて言われることだからである¹³³。第二に、たとえ離在的諸実体が、身体と合一している限りにおける我々の知性によっては知性認識されないとしても、しかし、それらは離在的諸実体によって知性認識されるのである¹³⁴。
- (10) 第十の論に対しては次のように言わなければならない。視覚が受け取ることができる諸々の形象は¹³⁵、可滅的であれ不可滅的であれ、あらゆる物体の似像であり得る。しかしながら、可能知性が受け取ることができる、表象像から抽象された諸形象は、離在的諸実体の似像なのではない。それ故、相似的ではない¹³⁶。

(以上)

¹³¹ Leonina 版と Robb 版は *per suum intelligibile*, Marietti 版は *per suum intelligere*.

¹³² Leonina 版と Marietti 版は *species autem a fantasmatis/phantasmatibus*, Robb 版には *autem* がない。

¹³³ Cf. *STI*, q. 88, a. 1, ad 4.

¹³⁴ Cf. *STI*, q. 88, a. 1, ad 4; *SCG III*, c. 45 (Marietti, 2224).

¹³⁵ *Species* (形象) という語は、「概念」や「本質」と同義に用いられる他、「外観」や「姿」という意味でも用いられる。Cf. Roy J. Deferrari, *A Lexicon of St. Thomas Aquinas* (Washington, DC: Catholic University of America Press, 1948), s.v. "species."

¹³⁶ Cf. *STI*, q. 88, a. 1, ad 5; *ibid.* a. 2, ad 1.